



緩和・在宅ケアの専門性を高める

宮城在宅・緩和ケア 包括教育プログラム

緩和医療学会認定医と在宅医療連合学会専門医を最短で取得

プログラム概要

研修スケジュール

36ヶ月間を基本とし、開始時期・期間は取得希望資格・研修内容等により応相談

エントリー期間

随時

応募資格・条件

臨床研修を含め5年以上の医師経験を有する方
※各資格の受検資格は学会の資格申請条件による

目指せる資格

日本緩和医療学会認定 認定医・専門医
日本在宅医療連合学会認定 専門医

研修認定施設

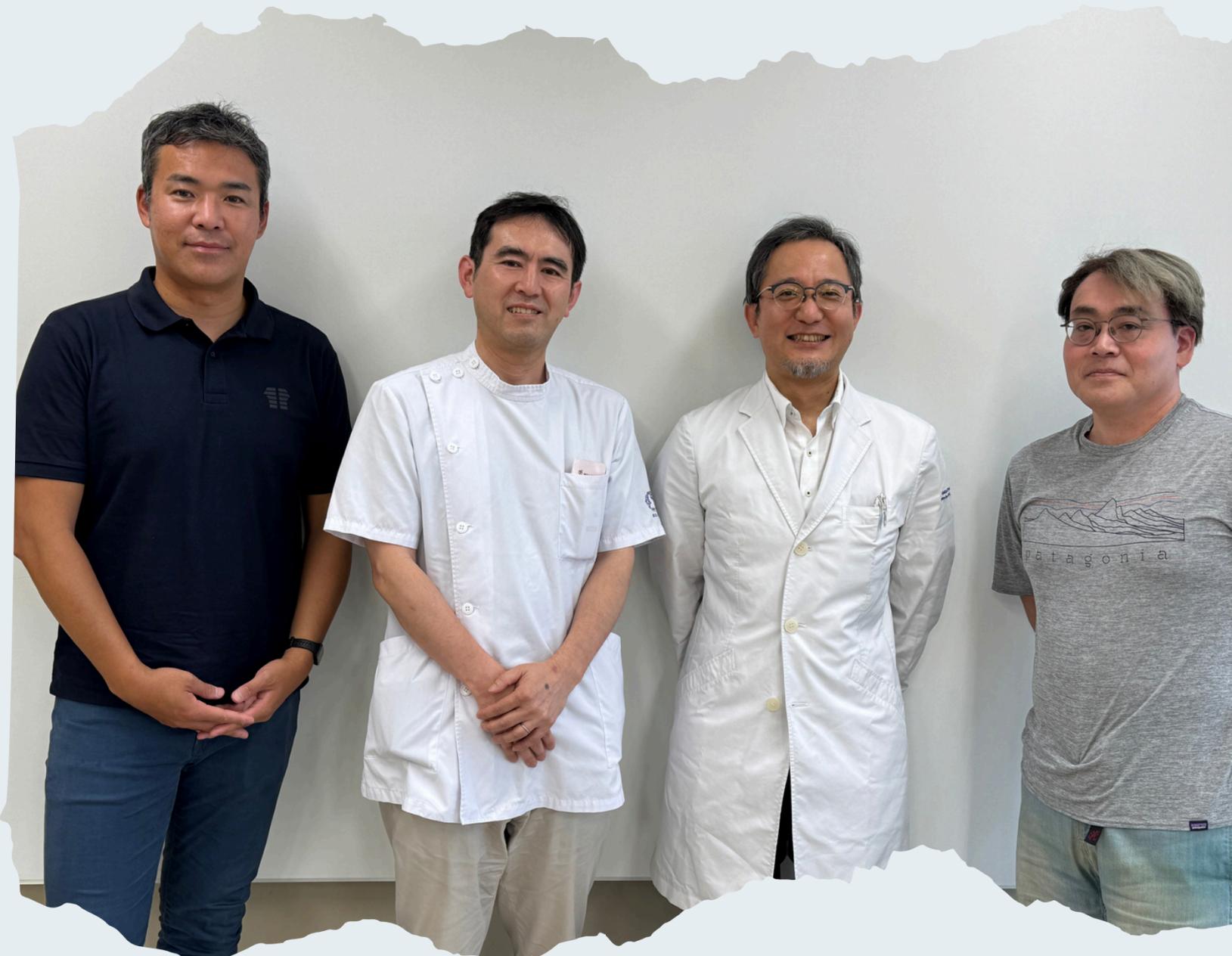
日本緩和医療学会認定基幹施設：岡部医院仙台、やまと在宅診療所名取
日本緩和医療学会認定研修施設：東北大学病院緩和医療科
日本在宅医療連合学会認定研修施設：やまと在宅診療所登米ほか

研修協力施設

東北大学病院腫瘍内科

はじめに

「病気だけではなく、患者さんの生活全体をケアする」という技術には正答がなく、求められるケアの形は、患者さんの生活スタイルや嗜好、今後の人生をどう生きたいかという希望、それを支えるご家族や介護環境によって異なります。

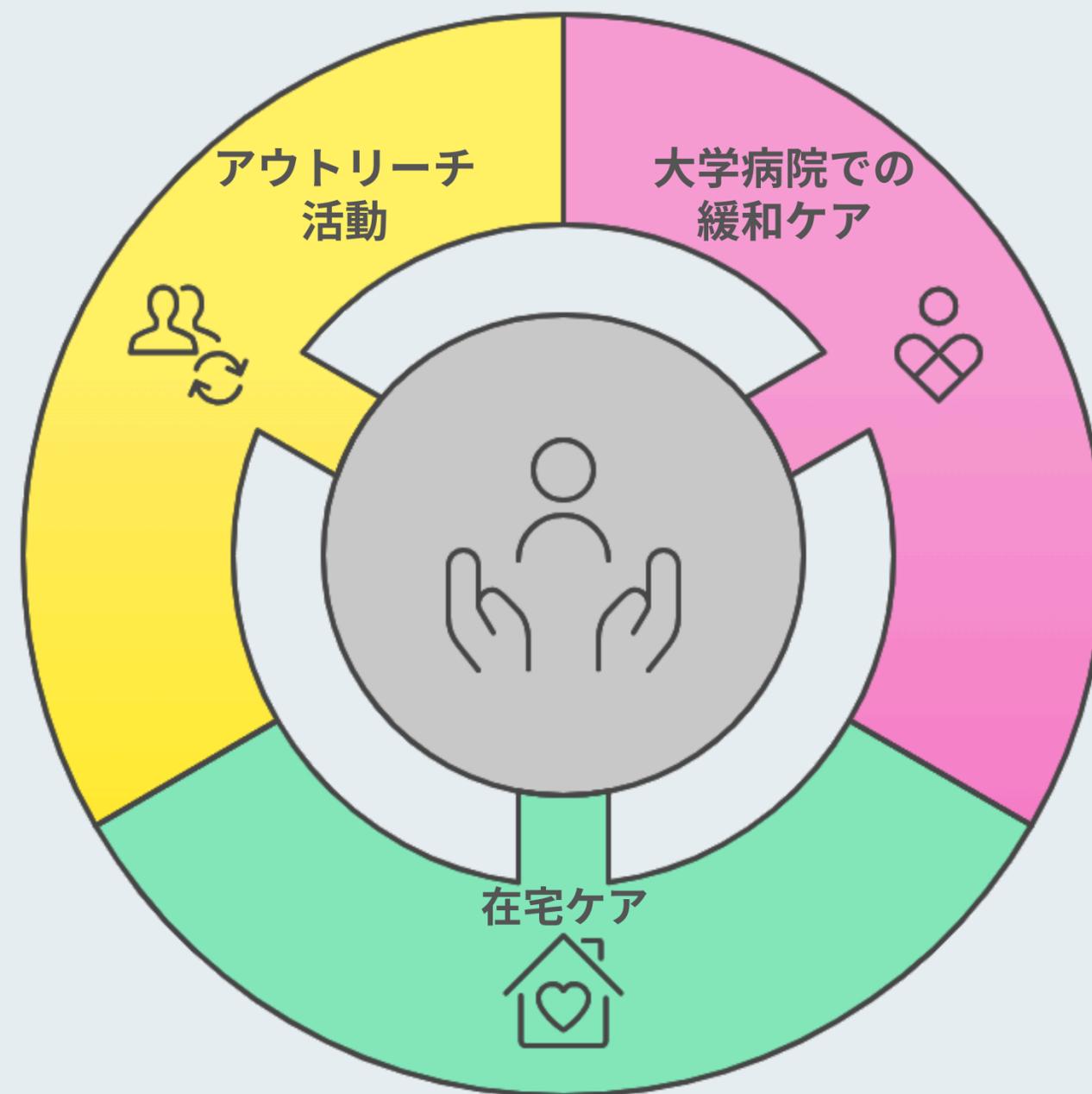


本プログラムは、病院完結型の緩和ケアや研究活動のほか地域でのアウトリーチ活動を実践してきた東北大学緩和医療学分野、在宅緩和ケアを専門としている岡部医院 仙台、宮城県を中心に在宅診療専門診療所を運営している医療法人社団やまとが共同で行っています。

宮城県内の緩和医療・在宅医療を牽引する三者が、それぞれの特性や得意分野を活かした教育の場を提供することで、地域での活躍を志す医師の育成と成長を促進していきたいと考えています。

プログラムの特徴

- 大学病院で専門的な緩和ケアを学べる
- 最短36ヶ月で、日本在宅連合学会専門医と日本緩和医療学会認定医の取得を目指す！
(日本緩和医療学会専門医の取得を目指す場合は最短3年間)
- 在宅緩和ケア専門診療所と幅広い疾患に対応する在宅診療専門診療所の両方で訪問診療を経験できる。
- 希望者はがん治療から学べる
- 研修スケジュールは本人が学びたい内容・期間に合わせてカスタマイズ可！



研修期間・ローテーションの例

※実際のスケジュールは、応募者の経験や希望を伺ったうえでご提案いたします

緩和ケアの知識を持った在宅診療医を目指す方へおすすめ 30ヶ月コース

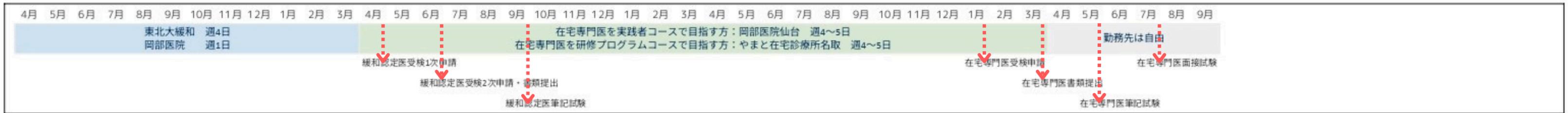


緩和ケア・在宅ケアをしっかりと習得したい方におすすめ 36ヶ月コース

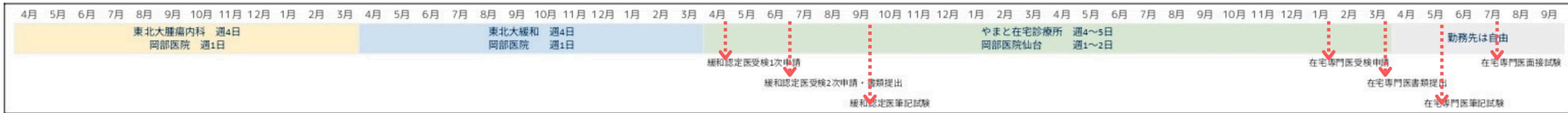


在宅緩和ケアを専門にしたい方におすすめ 36ヶ月コース

※その他、学会が定める諸条件を満たす場合、緩和専門医受験申請可能



がん治療から緩和ケア・在宅ケアまで。より専門性を高めたい方におすすめ 48ヶ月コース



※各学会の申請要項変更に伴い、プログラムは変更される可能性があります

指導医メッセージ

研修認定施設

指導医メッセージ



東北大学大学院 医学系研究科
緩和医療学分野 教授 井上 彰

当院は全国でも数少ない緩和ケア病棟を有する大学病院であり、他科入院中の患者さんに対処する緩和ケアチームや緩和ケア外来の活動も盛んです。教育機関らしく、多職種の特門家から学べる機会が多く、緩和ケアに関しても経験豊富なスタッフと議論を重ねることで、多面的な見方を学ぶことができます。多くの方の研修をお待ちしています！

研修認定施設

指導医メッセージ

医療法人社団 爽秋会 理事長 兼
岡部医院仙台 院長 河原正典



このプログラムは皆さんの将来を束縛するようなものではありません。皆さんのやる気次第で、皆さんの将来の方向性をも含めて、各責任者が相談・支援することになるでしょう。そして、私はこのプログラムを終了した方々が、様々な地域やフィールドで活躍する姿を心から見たいと思っています。

研修認定施設

指導医メッセージ



医療法人社団やまと 理事長 兼
一般財団法人やまとコミュニティ
ホスピタル 理事長 田上佑輔

やまとは、志や思いを持つ医師が自分のやりたいことを実現できる環境・チームを目指しています。東北大学緩和医療学分野、岡部医院との連携ではお互いの強みを活かし、医師のやりたい事を叶えるだけではなく、キャリア形成への支援もしていきます。興味ある方からの連絡をお待ちしています。

研修協力施設

指導医メッセージ

東北大学大学院 医学系研究科
臨床腫瘍学分野 教授 川上 尚人



緩和ケアを担う医師にこそ、がん薬物療法の考え方にも触れてほしいと願っています。治療から緩和への移行期は、患者さんと医療者双方にとって大きな節目であり、その理解が寄り添う力になります。腫瘍内科の視点を学ぶこの経験は、きっと将来の力になります。挑戦する医師を歓迎します。

先輩インタビュー

—はじめに永島先生のこれまでのキャリアと在宅医療や緩和医療へ興味を持たれた背景を教えてください。

内科専門医の取得を目指して多数の診療科をローテートしていました。呼吸器病棟の患者さんが強い症状に苦しむ場面に多く立ち会ったこと、腫瘍内科でがん患者さんと向き合ったことを通して、治療に必要なのは医学的知識だけではないことを実感しました。意思決定を支援するコミュニケーションスキル、退院前後の在宅支援の調整、緩和ケアにつなげるための根回し、苦痛緩和薬に関する知識、それらを学ぶ必要性と、在宅医療や緩和医療への関心が高まり、将来はこの分野を専門にしたいと強く思うようになりました。当初はサブスペシャリティ専門医の取得も検討していましたが、ライフイベントとの兼ね合いもあり、内科専門医の取得前後に思い切って在宅・緩和の世界に飛び込みました。

※一般社団法人日本専門医機構が定めている新専門医制度の2階建て部分



東北大学病院 緩和医療科の医師らと

—本研修についてはプログラムのWEBサイトで知ったとのことですが、どんな点が魅力でしたか。

在宅医療と緩和医療を同時に学べる点に大きな魅力を感じました。両者を体系的に学べるプログラムは全国的にも少なく、宮城で働くなかで地域への愛着が深まり、結婚というライフイベントも重なってキャリアに迷っていた時期に、このプログラムを知りました。研修内容も地域性も自分の希望に合っており「これだ！」と直感して応募しました。特に惹かれたのは緩和ケアの経験を深められる点です。東北大学病院緩和医療科での1年間で得た知識を在宅がん診療のパイオニアである岡部医院や幅広い疾患を診療するやまと在宅診療所で活かせる、という具体的なフィールドがあることに魅力を感じました。

—実際に研修に入られてからはいかがでしたか。在宅診療や緩和ケアそのものについての気づきや研修環境などについて教えてください。

研修前は「ご自宅でのお看取りを支える」、「在宅で鎮痛薬の調整をする」といったイメージを持っていました。しかし実際には、自宅に戻って元気に過ごされる方も多く、治療期を支える役割も大きいのだと気づきました。研修環境については大学病院の先生方に本当に良くしていただきました。オピオイドの使い方や意思決定支援、治療期の患者さんをチームでどうサポートするかなど、多岐にわたってご指導をいただきました。看護師さんを含めた多職種の方々からも多くを学ぶことができ、非常に実りある経験になりました。➤

—指導医や先輩医師との関係はいかがでしたか。

在宅医療も緩和医療も、さまざまなバックグラウンドを持つ医師が集まっており、特に在宅医療ではそれぞれの得意分野を補い合い、経験を活かしたディスカッションができるのが大きな特徴だと感じます。私は組織のなかで若手ですが、内科医としての知識が役立つ場面や、専門的な緩和ケアを学んだことのない先生方に対して緩和ケアの視点から意見を伝えられることもあります。自分が学ぶだけでなく、チームに貢献できていると実感できることに大きな喜びを感じています。

—在宅診療や緩和ケアのスキルは明確には測りにくいものだと思うのですが、本研修ではどんなことが身に付きましたか。

確かに手技とは違って「ここまでできるようになった」という到達点は見えにくいと思います。けれども、周囲の方が私の変化に先に気づいてくださり「先生のさっきの言葉、すごく良かったね」、「鎮痛薬がよく効いて喜んでたね」といった声をかけてもらえることで、自分の成長を実感できています。また、診療だけではなく、多職種連携の力も養われました。やまと在宅診療所で勤務してからは、さまざまな職種の方々と患者さんの在宅ケアを支えるなかで、医師としての関わり方や自分なりのリーダーシップを学びました。それはトップダウンではなく「患者さんのためにどうするか」を横並びで考える姿勢です。わからないことを一緒に考える素直さも身につけられたと思います。

—周りが成長に気付いてくれる、横並びで考える、って素敵ですね。多職種との連携で成長や変化を感じた具体的なエピソードはありますか。

がんの末期の患者さんで、在宅療養の大変さから「揺らぎ」が出た際、ケアマネージャーさんと環境を整え、訪問看護師さんと一緒に細やかな薬の調整を行いました。その結果、ご本人は苦痛が少なく穏やかに自宅で過ごすことができ、最期も晴れやかな表情をされていました。ご家族から「家で頑張ってくれた」と言ってもらったこと、私自身も「やりたかった医療ができた」と強く感じた出来事でした。

患者さんご家族の異なる希望を調整できたケースもあります。ご本人が希望を明確にされる前に体調を崩し、ご家族からは「すぐに入院を」と強く求められました。しかし診療に同行していた看護師さんが、ご本人の「本当は家で過ごしたい」というつぶやきを聞き漏らさずに拾ってくれたのです。そこで改めてご家族の思いを伺い、不安を感じる点について「在宅でも対応できます」、「社会制度も使えます」と一つひとつ説明しました。実際に急変時も問題なく対応でき、ご家族から「これなら家で見るのもいいかな」と言ってもらえました。研修前であれば入院を選んでいたと思いますが、身につけた知識やスキルを活かして、より良い選択をサポートできたと感じました。



永島彩佳医師 略歴

1993年 岩手県出身
2018年3月 獨協医科大学卒業
2020年3月 岩手県立磐井病院 臨床研修修了
2023年3月 東北労災病院 内科専攻医研修修了
2023年4月より本研修プログラム開始

——在宅医療ならではの大変さを感じるのはどんなときですか。

患者さんに十分な緩和ケアを提供できなかったときに大変さを痛感します。緩和ケア病棟や在宅で、せん妄や痛みがなかなか和らせず、「せっかくここで過ごすと思ったのに、苦しむ姿を見てばかりなのは辛い」と言われたときには、不甲斐なさを感じました。患者さんの苦痛を和らげ、望む形で最期を迎えていただくことを専門にしたいと思ってこの研修に臨んでいます。その望みに十分に答えられなかったときには、悔しさや心の重さを強く感じます。

——来年度は在宅医療専門医と緩和医療専門医を受験予定と伺っています。その後は研修での学びをどのように活かしたいと思っていらっしゃいますか。

宮城県は在宅医療も緩和医療もリソースは割と多いと思います。でも人口対比で不足している地域があったり、在宅療養を支える緩和ケアは十分に施されていないかったりする。東北6県で見ると緩和専門医は少ない。今後は私が学んだことを他の医療者にお伝えしていくことで全体のケアの質が上がって、自分が直接診ていない患者さんにも還元していくことができればいいな、そこに自分の力を使いたい、というふうに思っています。

——同じような進路を考えている医師へアドバイスやメッセージをいただけますか。

どこで学べばよいのか分からなかったり、他の医師とは違うキャリアを選ぶことに不安を感じたりすることもあると思います。そのような悩みや不安を解消するには「やりたい」という気持ちを大切に、まず一歩踏み出してみることが大切かもしれません。在宅医療や緩和医療に関心を持つ方は「患者さんの全人的苦痛をなんとかしたい」という温かい思いを持つ方が多いと感じます。そうした方にとっては自分の想いを診療に反映できる分野ですし、これまでの領域にいたとしても活かせる知識や経験がたくさんあります。まずは一度飛び込んでみるのも、1つの選択肢かと思います。

——永島先生はサブスペシャルティ研修には進まずに本研修に進まれました。他の医師に勧めるとすればサブスペ取得後と前どちらがより良いと感じますか。

私自身どちらがより良いかはまだ判断しかねています。サブスペシャルティを取得することは、自分の専門性や価値の証明となり安心感につながりますし、そこで得た知識は在宅医療や緩和医療に進んだ後も患者さんに還元できると思いますので、サブスペ取得後に本研修を受けるのも一つの良い選択だと思います。私の場合は進路選択と結婚というライフイベントが重なって「今抱いている熱意をサブスペ取得後まで維持できるだろうか」と考え、こちらを選びました。おそらく多くの方が「自分の進んだ道の方が良い」とアドバイスなさると思います。だからこそ、自分にとって本当に必要なのはサブスペ専門医なのか、あるいは今の熱意をすぐに形にすることなのか、一度じっくり考えてみるのが大切だと思います。➔

——本研修に適した年代はあると思いますか。

若手だと新しい分野や組織に馴染みやすく、教える請いやすいというメリットがあるかもしれませんが、一方で、在宅医療や緩和医療には40代、50代になってから転向される先生方も多く、そうした方々が各領域の先駆けとなって活躍されています。

「研修」と聞くとベテランの先生方にはイメージしにくいかもしれませんが、それまで培ってきた知識や経験を、組織に還元しながら学ぶことも十分可能です。ですので、年齢はあまり気にせず取り組める研修だと思います。

——最後に、在宅医療と緩和医療そのものの魅力と、両方を学んで感じることを教えてください。

在宅医療には「その人の人生を丸ごと見られる」という魅力があります。病院では治療が目的のため、治療が終わったら関わりが薄くなり、退院後の生活は見えにくいものです。けれどもご自宅に伺うと、その方が大切にしているものや、ご家族との写真、仕事や思い出の品などに触れることができます。そうした背景を踏まえてゆっくりお話しできることで、その方の人生観を軸に診療を進められます。薬の調整や社会的処方も人生観に基づいて行い、最期まで支えられるところに大きな魅力を感じています。緩和医療の魅力は、知識がなければ取りきれない苦痛をアセスメントし、和らげることができる点です。

そして両方を学んで感じる在宅緩和ケアの魅力は「患者さんの苦しみをきちんと和らげられる」、「患者さんの人生を最後まで見届けられる」と、自信を持って言えるようになることだと思います。もちろん、できることが増える一方で、新たに見えてくる課題や迷いもありますが、それも含めて日々の診療を楽しみながら続けられています。



よくあるご質問

1. 雇用形態はどうなりますか？

→各研修先と雇用契約を結んでいただきます。

研修スケジュールや組み合わせによっては出向契約が可能な場合もございます。

2. 当直はありますか？ある場合、何回程度ですか？

→全施設、当直はありませんが、夜間・休日の待機当番はございます。

回数はいずれの施設も、平日1回、休日1（-2回）です。

ご事情により待機が難しい場合はご相談ください。

3. 休みは取れますか？

→法定休暇のほか、有給休暇も事前申請で取得できます。

4. 給与を教えてください

→給与は各施設、臨床経験等によって異なります。

面談後、研修予定施設より個別にご案内いたします。

5. 勉強会や研修会はありますか？

→PEACE、SHARED、そのほか診療所内の勉強会や学会主催のものもあります。

在宅医療、緩和医療、社会福祉についてなど、様々なものがあります。

6. 修了後の進路はどうなりますか？

→自由です。研修施設で勤務を継続いただくこともできます。
また、キャリア選択の相談も気軽にさせていただきます。

7. この期間で確実に資格を取得できますか？

→期間は各認定資格の受験資格を得るために必要な期間をベースにしております。
期間以外の要件（学会への課題提出や学会発表等）を満たせなかった場合、
受験資格を得られないこともございます。

詳細は、各学会の要綱もご確認ください

【日本緩和医療学会認定医・専門医】

<https://www.jspm.ne.jp/specialistCertification/bylaws/index.html>

【在宅医療連合学会専門医】

<https://www.jahcm.org/system.html>

8. 在宅専門医のみ、または緩和認定医や専門医のみの取得も可能でしょうか？

→可能です。お問合せ時にご希望を添えてください。

研修開始後に取得したい資格が変わった場合なども、ご相談に応じます。



ご応募・お問合せ先

事務局宛にメールにて、氏名、略歴、研修開始希望時期を添えてお問い合わせください。

宮城在宅・緩和ケア包括教育プログラム事務局
kensyu-yamatodr@yamato-clinic.org